

11月10日、政策秘書課職員と市役所内で話しているとき、「自分の周りに天然素材のものはあるか？」と話を切り出されました。

## 無駄なもの

職場にいる人は、自分の身の回りにあるものを見渡してみてください。

きっと多くの職場は、壁紙、机、ボールペン等の石油製品を中心に、仕事するために必要な人工物に囲まれているでしょう。職場においては、生産性のないもの、成果につながらないものは、無駄なものとして、切り捨てられます。

一方で自然には、人間から見ると無駄なものがたくさんあります。きれいなのにトゲがある花。触るとかぶれてしまう漆の木。次から次へと生えてくる雑草。大人から見たら、アリすらも無駄なものかもしれません。しかし、自然は寛容で、互いを排除せず、「そこに居ていいよ」と譲り合って生きています。

今、私達は、日々の暮らしまでも、「無駄なものは切り捨てる」という職場の価値観になってはいないでしょうか。

桜は美しいと思っても、その後に発生する毛虫は許せなかったり、紅葉は美しいと思っても、目の前の落葉はゴミだと思ってしまうたり。生きていく上では、意見の違いがあっても当たり前なのに、白黒をはっきりさせることが良いという風潮があるような気がしてなりません。自分にとって無駄なもの、役に立たないものを切り捨てる考え方が、不寛容な社会を作り出しています。その一つの例が、神奈川県相模原市で起きた障害者施設殺傷事件ではないでしょうか。



「折り合いをつける」ことを学ぶ機会も減ってしまいました。折り合いをつけるとは、10のうち、互いに5と5まで進むことはありません。相手が3しか進めないならば、もう一方は7まで歩み寄ることで。しかし、「私は7やったのに、相手は3しかやってくれない」と不満を感じる人が多いように思います。

多世代で暮らすことが多かった時代は、嫁姑の問題、子守りなど、日々の生活で起きるわずらわしいことを通じ、互いに折り合いをつけることを学んできました。しかし、最近は、いろいろなことが、料金を支払うことでサービスとして提供してもらえるようになりました。料金を支払っているから、折り合いをつける必要はなく、自分の要望を強く言うことができます。

今、高齢の方から、「子どもに迷惑をかけたくないから、老人施設に入居したい」という話をよく聞きますが、それではますます、次の世代が折り合いをつけることを学ぶ機会が少なくなってしまいます。

日本中で人口が減り、これまで通りの行政サービスや介護サービスを提供することが難しい時代がやってきます。私達は無駄なものも受入れ、折り合いをつけることを学び、家族同士、地域同士が文句を言ったり、文句を言われたりすることを互いに受け入れていくことが必要な時代がやってきたと感じています。

～市長の話を聞いて～

私自身、仕事でも家庭でも「私はここまでやっているのに…」と思うことがよくあります。反対に、相手からそう思われていることもあるでしょう。「私はここまでやっている」と思えば思うほど、やらされている感になり、楽しくありません。「折り合いをつける」ことは、自分自身が楽になることなのかもしれないと思いました。